





いて、上手く動くことが出来なかった。

慌てた挙げ句、思い切り口の中に水が入って息が出来なくなり、雫は今にも溺れそうになる。

(だ、だえか、たすけて……！)

すると——不意に、手に持っていた竹刀を、くい、と引かれる感触があった。

誰かが竹刀の先を握っているらしく、くいくいと釣りでもするように引いてくる。何者かは知れぬが、雫を引き揚げようとしてくれていたようだった。藁にも縋る思いの雫は、その引手に引かれるままに身を任せ、ゆらゆらと水中を動いていく。

そうして何とか雫は、泉から揚がることが出来た。

地面に膝をついた雫が咳き込んでみると、その誰かは背中をとんとんと軽く叩いてくれる。ようやくと人心地ついた雫は、その引手の顔を見るために濡れ髪を払い、顔を上げた。

「——お主、大丈夫か」

きよとんとした顔でそこにいたのは——あたかも時代劇から抜け出てきたかのような身形をした、一人の少年であった。

歳は雫と同じくらい、月代を剃り上げていない、元服前の髪をしている。少年らしい愛らしい声で、衣服はそれなりに高価な物に見える。澄んだ瞳で、雫の顔を真っ直ぐ覗き込んでいた。

「いきなり空から落ちてくるから驚いたぞ。何があったのだ。鳥から落ちたか、物怪妖怪の類か——それとももしや其方、天つ国の住人か」

一人勝手なことを云っては、何やら眼を輝かせている。雫は最前とは違う意味で混乱し始めた。助けてくれたのが不審者では、元も子もない。

取り敢えず立ち上がると、雫は濡れそぼった服の裾を簡単に絞りながら、薄暗い辺りを見廻した。周囲は気の安らぐ静かな竹林である。雫は首を傾げながらも、目の前の不審な恩人に向かって礼を云うことにした。

「ええとその……とにかく、助けてくれてありがとうございます。私は、御剣雫といます。あなたのお名前は？」

無邪気な眼をした少年は、にっこりと笑って応えた。

「私は颯太と云う。東雲颯太だ。雫は天つ国の侍か」

「違います。ただの中学生です」

「ちう、がくせい」

颯太と名乗った少年は、今度は当惑した様子で首を傾げた。歳こそ雫とさして変わらぬものの、その表情や振る舞いは、まるで幼子のように素直で判り易い。

(へんな子……)

「それでその、颯太君のその格好は、コスプレか何か……？」

「こすぷ——聞いたことのない言葉だ。ははあ、雫は外つ国の生まれか。それにしてもその相貌かお、如何にも日本男児と云った風だが」

「私は女です！」

端麗な顔を引き攀らせ、雫ははつきりと応えた。流石の雫でも、男と取り違えられたことはない。すると颯太は、失敬なまでに驚いた。

「え。あ。そうなのか。鬚を結い竹刀を持ち袴を穿いておるのだから男かと思うたが——ならば、男装の女剣士か」

大真面目に颯太は尋ねてくる。否定するのも面倒になり、ああまあそうですと雫は投げ遣りに返した。何が袴か。確かに下衣スカトは、一度も切りも折りもししていない膝丈ではあるが。

「それはいいんですが……ここは、どこですか。何が起きたのかはよく分からないですけど、とにかく私、家に帰らないと」

「此処は、町に程近い竹林だ。もう少し行けば、江戸の町がある。私は其処に宿を取るつもりだが。雫の家とは何処なのだ。空ではないのか。女子おんなならば、天女様だな」

云うなり颯太は、ニカツと笑った。今度は雫も、そう悪い気はしない。

(それにしても、江戸って……東京？ この若さでお祖父ちゃんみたいな江戸文化愛好家、か何かか。ちよつとへん、というか、へんすぎるけど……悪い子ではない、かな。たぶん)

しかし帰るにせよ、何が起きたか子細を確かめるにせよ、取り敢えずその江戸の町とやらへ行く必要がある。雫は、下衣スカトを間近で興味深そうに眺めている颯太に向かって云った。

「その、颯太君。よかったら町まで連れていってくれませんか？」

「うむ、よいぞ。こつちだ」

すぐに承知した颯太は、近くの岩の上に置いてあつた荷物を手早く纏めると、雫の先に立つて機嫌良く歩き出した。筆のようなものが幾本か風呂敷包みからはみ出しているのが見えて、雫は訝しんだ。二人はそうして、池の端を後にした。

連れだつて歩いていると、そよそよと風が竹の葉を靡かせ、気の冴える薫りが鼻を擽る。心地よいことはよいが、濡れた衣服を身に纏う雫には、少少寒く感じられた。颯太の後に続きながら、雫はへくし、と小さな嚏を洩らした。

そんな姿をちらりと見た颯太は、不意に前を指さした。その先を見れば、竹林が拓けて、向こうから陽光が射し込んでいる。眼を細めて颯太は云つた。

「何、今は夏の盛りだ。歩いておれば着物などじき乾く——」

竹林を抜けると、目映い光で一瞬眼が見えなくなる。

「——ほれ、あれが江戸の町だ」

眼が慣れてくるにつれ、雫にもそれが見えてきた。

「うわあ……」

其処には——己が眼を疑うほどに大きく賑やかで、そしてどこか優しく、懐かしい町並が、広がっていた。

竹林は小さな丘の上にあつたらしく、出た処からすぐに、その町の全景を見下ろすことが出来た。竹林から伸びる荒れた路の両側に、次第次第と掘建小屋が建ち並び、その次は貧乏長屋、奥へ進むに従つてそうした住処の群は、立派なものへと変わっていく。

往来を行き交う人、人、人。駆け回る粗末な着物を着た子供たち、その周りを跳ねる野良犬、長屋の端で喋る女房連中、見るからに胡散臭げな小者。ひよひよいと行く駕籠に、涼しげな音を鳴らして風鈴屋が横切る。

店屋と思しき一際目立つ屋敷には、家紋を染め抜いた幕が下り、休む間もなく客が入りしている。茶屋の店先では、寛いだ風の男女が、団子を口にしては笑い合っていた。

更にその先では川に反橋が架かり、絶える間もなく人が渡っている。艶

やかな姿の娘子もいれば、胸を張って歩く侍の姿もある。商家、旅籠<sup>はたご</sup>、芝居小屋、寺に神社。騒がしい声が、此処まで聞こえてくる。橋のずっと向こうには、豪華な屋敷が建ち並んでいて、そして最奥<sup>さいおく</sup>に見えるのは、美しい天守閣を持つ城だった。

——それは紛れもなく、生きている町であった。

「これ……本物の」

「本物の、江戸だが。どうかしたか。さあ霰、こんな処でぐずぐずしていると、いつ何時<sup>なんどき</sup>件の合戦に巻き込まれるか知れん——ほら、行くぞッ」

茫然としたままの霰の手を躊躇<sup>ためら</sup>いなく取ると、颯太は町へ向かって歩み出した。

手を引かれながら、霰はまだ、信じられない。

何故かは判らぬが——。

霰は、江戸時代に来てしまったようだった。

タイムスリップ、異次元世界などと、詳しくもない語り物の言葉が霰の頭をぐるぐる廻る。廻れば廻るほど、混乱は深まっていく。理の通らぬことに霰は滅法弱い。

そうして竹林の陰から出て暫く野路<sup>のみち</sup>を歩いていると、颯太の云うとおり、忽ち制服が乾きだした。そう云えば陽光も強く、何やら妙に暑い。

(……夏？ さつき夏っていったような……)

今は春のはずだった。先日霰は進級したばかり、制服も長袖を着ている。しかしこの容赦ない陽の光は、間違いなく盛夏<sup>せいげ</sup>のものである。気付けば、みんなんと云う蝉の囁<sup>かまひす</sup>しい鳴き声も響いていた。霰は混乱したままの頭で考える。

(時代も変わって場所も変わって季節も変わって……これ、どうなってるの？ どうしよう。私……どうしたら帰れるんだろう)

ここまで来て霰は、ようやく不安を感じ始めた。しかし何はともあれ、状況を確かめなければなるまい。

「あの……颯太君、今は……何年ですか。寛永？ 元禄？」

町の端、檻樓屋<sup>ぼら</sup>の合間を抜けながら、霰は颯太に恐る恐るそう尋ねた。

取り敢えず、江戸時代にしても何時の辺りかを把握しておきたかったのである。此処で今何が起き、何が騒がれているかぐらいは判っていないければ、どうにも心許ない。幸い雫は日本史に明るいので、時代さえ分かれば、治世の具合も大凡判る。動乱期ならば、それなりの覚悟が要るであろう。

ところが、颯太から返ってきたのは、如何にも間の抜けた妙な応えだった。

「知らん」

「知らん？ 今が何年か、知らないの？」

「知らぬものは知らぬ。どちらでもよいことではないか」

何故そんなことを訊くのか、とても云いたげな口振りであった。

「どちらでも……じゃあ、将軍様はどなた？」

「知らん。将軍様は将軍様だ」

当たり前のような顔をして、颯太はそう云い切る。雫はまた混乱した。

一般の町民の常識はこんなものだったのだろうか。それともただ颯太が残念な子だと云うだけなのか。よく判らない。雫は首を傾げた。

(どうということだろ……？)

「それにしても——雫のその格好は目立つな。よく似合ってはいるが」

そう颯太に話しかけられてはっと気づけば、何時の間にやら二人は、風格のある家屋や店屋が辺りに立ち並ぶ、町中にまで入り込んでいた。雫たちを囲むようにして、江戸の町人たちがじろじろとこちらを眺めている。

無論皆、雫の水兵服を怪しんでいるのである。普段注視されることの少ない雫は、些かいたたまらない気持ちになった。

颯太も雫の服の襟を頻りに弄りながら、興味津津に話しかけてくる。

「斯様な手触りの布は初めてだ。綺麗な色合だし、南蛮のものであろう。綻びもなくよく出来ておるな。それに——」

そう云うと。

颯太は徐ろに、雫の下衣を捲った。

「——変わった袴だ。風が吹いたら捲れるぞ。禪も珍しい」

雫の下穿を覗き込んで、ふん、と鼻を鳴らす。

「熊柄か」

雫は即座に竹刀を振り上げると、思い切り颯太に面を打ち込んだ。

しゃがみ込んでいた颯太の頭に、へし折れんばかりの勢いで竹刀が直撃し、パァン、と晴れ渡った空のような景気の良い音が鳴り響いた。

颯太は頭を押さえて悶絶した。

「痛っ、だあああああッ、な、何をするッ」

「それはこっちの台詞だ！ 人前でな、何を堂々と」

ここまで無遠慮に男子から扱われたのは生まれて初めてで、頭から湯気を吹きながらも雫はどう対処してよいか判らない。咄嗟に竹刀を構えると、雫は真っ向から颯太と向かい合った。慌てて颯太は弁解する。

「いや確かに悪かったがしかし男同士なのだし禪ぐらいで」

「だから私は女だ！ ば、馬鹿にしてるのか！」

裏返った声で雫がそう云うと、漸くそれを思い出したらしい颯太も、顔を赤らめた。

「あ、い、いや違うッ、私はそんな、下劣なつもりではなく、単なる好奇心でッ」

「なお悪いわ！ 許さん、成敗してくれる！」

つられて待じみ言葉遣いになった雫は、再び竹刀を振り上げた。ひっ、と颯太は縮こまり、両手で頭を守る。

その時だった。

「——誰か、誰かあ」

何処からか、助けを求めるか細い女の声が聞こえた。

### 三

赤い顔の雫がふと気づけば、先程まで雫たちを囲んでいた野次馬も居なくなっている。残らず向こうへ移って、何やら囃し立てている様子だった。其方の方が気になり出した雫は、取り敢えず無礼者の始末は後に回すことにして、その人垣を分け入ってみることにした。

「やいやいやい、何処の御姫様だか知らねえが、人様にぶつかっておいて詫びの言葉もねえ、仕舞いにや助けを呼ぶたあどういう了見でえ。ええ」

「何か云ったらどうだ別嬪さんよう、ああコラ」

そこでは——路の交叉した辻の真ん中で、頽れるように座り込んだ美



しい娘が、一目でそれと判る粗野なやくぎ者二人に、口汚く罵られていた。「——貴様ら、わらわに斯様な口を利用して、ただで済むと思うておるのか」娘はそれでも気丈に云い返している。品のある相貌に芯のある声音、きつと睨み付けるその目つきにも、育ちの良さが感じられた。身に纏う着物も目立たぬ柄ながら、上等の品であることは雫にも判る。しかし男二人はそんな言葉も意に介せず、下卑た顔を見合わせて笑うばかりである。

「わらわ、か。こりや本物の上物かも知れねえぞ」

「面白え。有り難く頂戴しようぜ」

見窄らしい三下さんしたとはいえ、間に割って入れば何をしてくるか知れたものではない。野次馬連中も眺めるばかりで、誰も助けようとはしなかった。娘は強い眼差しで、野次馬の群を見据えている。そんな中で雫はどうしたものかと困って、頭を掻いた。

すると、不意にその娘は、手を付いて立ち上がった。

そして、思いの外俊敏な動きで——。

雫の元まで駆け寄ってきた。

「……え？」

あまりに唐突なことにきよとんととして、雫は動くことが出来ない。

(え、え、え?)

仕舞いに雫の腰の辺りに寄り縋り形になったその娘は、さっと振り返ると、男たちに向かって大声ではっきりこう云った。

「——この者が、わらわを守るのじゃ」

「はい？」

雫はその場で、ぽかんと口を開いた。何を云っているのか判らない。

すると娘は、ついぞ眼にしたことのないようなきつい視線を雫に向けて、こう云い寄った。

「守ってくれるなッ」

「いや、あの」

「——なッ」

「え、あ、はあ」

よく判らぬまま勢いに負けて、雫は何となく頷く。

すると男たちが、へらへら小馬鹿にした調子で嗤いながら、此方へやって来た。垢染みた着物の匂いが、ぷんと鼻をつく。雫は苦い顔になった。いつも何かと面倒事に巻き込まれやすい性分の雫ではあるが、これはあまり愉快そうには思えない。

汚い齒を剥き出して、男たちは肩を揺らした。

「へえ、若侍のお付きかい。にしちゃ、奇天烈な態なましてやがる」

「女みてえな未成うらなり面だ。しかも何だそりや、竹刀じゃねえか。相手にするまでもねえなッ」

「……女、みてえな？」

かちんと来た雫は、男の言葉を聞いて眉間に深く皺を寄せる。娘のことなどより、こちらの方がよほど腹が立った。竹刀の柄を握り直すと、雫はきつと男たちを睨め付けた。

しかし男は、嘲るように続けた。

「見たまま云っただけじゃねえか。男だったらもうちつと——」

「誰が……男だ！」

男の言葉を最後まで聞かず——。

雫は竹刀を上段に構えると、一気に踏み込んだ。

相手は咄嗟に懐へ手を突っ込むが、何を出させる間もなく、雫は鋭く小手を決める。男の手を離れた合い口が、宙を舞って地面に刺さり、野次馬から悲鳴が漏れた。間髪入れずに真っ直ぐ突き入れると、腹を押さえて男は倒れる。

この野郎、と今度はもう一方の男が、雫の脚を払いにかかった。

それをすかさず跳び上がって躲かした雫は、そのまま流れるように胴を打ち込む。こんな下郎に遠慮など無用、とばかりに、倒れ込んだ男の鼻先へ、竹刀を突きつけた。

踰こりめき情けなく尻餅をついた男は、齒嚙みをして呟いた。

「なんて野郎だ——」

「だから野郎じゃないと言っている。まだやるか！」

雫の気迫に、男たちは後ずさった。野次馬からはわっと歓声が漏れる。

しかし、男たちは——。

にやり、と不敵に笑った。

「旦那、お願いしやす」

そう云う二人の背後、柱の陰からのそり、と現れたのは――。

地味な着物を着崩した、目付きの鋭い痩せぎすの浪人である。

用心棒か兄貴分かは知れぬが、いずれにせよ道を外れた者らしい。手入れをしていない鬘が崩れてはいるものの、腰にはきちんと刀を差している。

無論それは、真剣である。

雫は拙い、と直感した。

「ふん、愚か者共が。戦は敵う相手に挑むが筋。素手で竹刀に勝てるか。博奕とは違うのだ。憶えておけ――」

すらり、と刀を抜くと、浪人は眼を見開いた。

「――剣を交えるならば、万全を期さねばな」

そして間断入れず、斬りかかってきた。

すんでの所で避けた雫であったが、耳元でこう、と鳴る風切り音に血の気が失せる。云うまでもなく、真剣で試合などしたことはない。普段教えられる剣術は如何に無駄なく相手を打つかというものであり、生きるか死ぬかの瀬戸際に如何とすべきかなど、雫に判るうはずもない。

鈍重な鉄の塊が己の生命を狙う――否、己の軀を切り捨てんとして迫りくるこの状況は、ちんけな芝居の殺陣から浮かぶ想像を、遙かに超えていた。

常軌を逸した眼の浪人は右へ左へ刀を振り分け、身を守る術もない雫は、ただただ後ろへずりずりと下がっていく。雫が首を引いたところにそのまま斬り込んできた刀は、脇に建つ長屋の柱にがっしと食い込んだ。衆人が響動めく。

齒を食い縛り、必死になって雫は避け続けるが、防戦一方の救いのない窮地の中、額には厭な汗が流れ始め、唾を飲む。背後からは野次馬たちが泣き叫び、逃げ惑う音だけが聞こえた。刀はあたかも意志を持つかの如く四方へ流れ、雫の命だけを狙ってくる。

浪人の上気した声が、耳にべったりとまといつく。

「どうしたどうしたどうした。少しは齒応えがあるかと期待したというに――これでは男の風上に置けぬわッ」

何とかせねば、と雫が無意識のうちに竹刀を構えると――。

下から振り上げた浪人の刀が、半ばからそれをすぱん、と躊躇いなく両断する。

飛んでいく竹刀の向こうに見える浪人の歪んだ顔には、

一線を越えた者の凄みがあった。

この上なく愉悦に満ちた殺意。

もう、逃げ場はない。

——私、殺される。

初めて感じる生命の危機に、雫は漸く恐怖を覚えた。

——助けて。

「雫ッ」

するとその時、背後から、その名を呼ぶ声が聞こえた。

隙を見せることも厭わず、雫は振り返る。

そこにいたのは——何とか人垣根を掻き分けてきた、颯太だった。

四

「ちよつとあなた、何して……」

すると颯太は何故かごそごそと、風呂敷包みから紙を一葉、筆を一穂取り出した。墨を含んだままのその筆で、さらさらと手早く紙に何かを描き付けている。

そして何を思ったか、見せつけるかの如く、此方へ向けてその絵をしつかと示してみせた。

描かれていたのは——。

童子の戯書ざれがきのような、虫の絵であった。

「そ、そんなことしてないで、早く……!?!」

——刹那。

むくりむくりと絵が動き出した。

手足を動かし、羽を広げ——。

それは紙の中を、縦横無尽に飛び回る。

眼に映る光景が信じられず、唾然とした雫、浪人、やくざ者二人は、動くことも叶わない。

蠢<sup>うごめ</sup>き羽<sup>は</sup>撃<sup>た</sup>き舞<sup>まい</sup>飛<sup>と</sup>び唸<sup>うなり</sup>り。

仕舞いに紙を突き破るような勢いで飛び出してきたのは、

人の頭ほども大きさのある、三匹の不格好な羽虫だった。

勢いそのまま、ぶうううんとうんと耳障りな羽音を立てるその得体の知れない虫たちは、浪人とやくざ者に向け、尻の鋭利な針を突き出して襲いかかっていた。

一瞬何が起きているのか判らなかつた三人も、次の瞬間、

「——ワアアアアアアアアッ、ば、化物おとおおおっ」

と情けない悲鳴を上げ、逃げ出した。

一転今や、誰の眼にも勝敗は明らかであった。

やくざ者たちはひいひい喚きながら右へ左へ逃げ惑い、その後を、巨大で不細工な虫たちが執拗にぶんぶんぶんと追い回していく。それにつられて野次馬たちも忽ち狂乱に陥り、大声で騒ぎ立てながら、四方八方へとまるで蜘蛛の子のように散っていった。

「助けてくれえ、妖怪だ、妖怪が現れたよッ」

「どうとう攻め込んできたんだ、もう江戸はお終いだあッ」

彼方<sup>あちら</sup>此方<sup>こちら</sup>から、そんな奇妙な叫び声も聞こえてきた。

(あ、あやかしが攻め込んできた……?)

腰を抜かして地べたにべたりと座り込んだまま、雫は周りで練り広げられている訳の判らぬ騒動を、ただただ茫然と目を瞬かせて見つめていた。

「——大丈夫か、雫」

何事もなかったかのように駆け寄ってきた颯太は、雫の肩を支えて立ち上がらせてくれる。一方雫は、まだ胸の動悸が収まらない。

懸命に頭の中を整理しながら、雫は傍らで何食わぬ顔で立つ少年に向かって尋ねた。

「あ、あれは……」

「何、案ずることはない。彼奴<sup>きやつ</sup>らを刺したら何処へなりと飛んでいくだろう」

「そうじゃなく！ 今のは、一体……」

颯太が片手に握りしめている、今は真つ新あらたの紙を雫は見つめた。

確かに此処から、あの虫たちは湧き出でてきたのである。何やら形が歪いびつではあったが、しかし間違いない、あれは生きた虫だった。颯太が描いた戯書が、たちまちのうちに紙から頭われ、すぐその中空を飛び回っていたのだ。

術の掛かった特別な紙なのか。

それとも筆に、秘密があるのか。

不思議に思っつて雫がしげしげと眺めっていると、ああ、と首を竦めて颯太は応えた。

「ああ、この力のことか——実を云うと、私にもよく判らん。紙や筆は関係ない。何であるうが私が念を込めて描くと——あのようにして紙から飛び出す。血肉を得る。生命いのちを持つ。何時の頃からか、そうなったのだ」

大したこともなさそうに、颯太はそう云つてのけた。ふと気づけば周囲からは野次馬も、況や浪人たちもいなくなっている。人ひと気のなくなった江戸の町は、ひどく静かだった。

「一応云つておくが、私は妖物ではないぞ」

詰まらなそうに颯太が注を加える一方で、雫はまだ興奮冷めやらない。

まして危ういところを二度も助けてもらったわけだから、最早颯太は命の恩人である。

雫は苦手な褒め言葉を、不器用ながらも一所懸命並べ立てた。

「いやそんな……凄あさましい。私はそれは、凄あさましいことだと、思う。描いたものに生命を吹き込めるって。普通出来ることじゃないよ。そのおかげで私は助かったんだから……その、ありが、とう」

「うむ」

颯太は満足そうに頷いた。更に雫は讃辞を重ねる。

「それに、さっきのあの、ハエ。あのハエも、その……本当によく描けてたと思うし」

「——蜂」

すると、急に無表情になった颯太は腕組みをして、ぼつりと小さく云つた。

「え？」

「——尻から針を出して人を襲う蠅がいるか」

そう聞いた雫は、浪人たちを追いかけてどこぞへ消えていったさつきの奇怪な虫を思い起こしてみる。しかし、あの絵は如何に目を凝らしてみても蠅、精一杯の好意を込めて見ても、亀虫であった。

暫く二人は、無言になった。

時間が過ぎていく。

なんとか雫は、口を開く。

「その……何と言つていいか」

「可哀想なものを見る眼で見ると」

いきなり顔を赤らめると、颯太は早口に云い募った。

「何も云わんでいい、手前の絵の善し悪しなど重重判っているッ。どうせ下手の横好きだ。こんな程度で絵描きを目指すなど百年早いわなッ、ふん」

上達するまで家には帰らぬと云うて飛び出してきたが、こんな調子では帰る頃には今浦島だ、一族郎党皆滅びておるわ、と颯太は喚き散らして地団駄を踏んだ。どう慰めてよいやら判らず、雫はますます狼狽する。そうするうちにふと、近くに置き放しになっていた颯太の包みが目に付いた。その中の他の絵を、雫はぱらぱらと手にとって眺めてみる。

先程の竹林と泉を描いたらしきものが幾枚もあったが、それらも見ようによつては、籠に盛られた雲丹うんたんか、無精髭の生えた顎の絵のようでもあった。多分そんなものは描かないだろう、と好意的に解釈して、やつと竹林と判断しただけである。雫は頭が痛くなった。

悔しきで泣き出しそうになっている颯太を、何とか雫は宥めようとした。

「で、でも、それでも充分凄いと」

「やかましいッ」

「あ、う——」

その時不意に、そんな大人しげな少女の声が、他方から聞こえてきた。

二人して見てみると、そこにいたのはこれもまた雫と同じ年くらい、大きな眼まなこをした、可愛らしい女子おなごである。最前の騒ぎで地に倒れている娘子を、丁寧に介抱していた。

介抱されているのはもちろん、雫に喧嘩の首尾を押しつけてきた、あの自分勝手な娘である。上等の着物の裾を乱して、悠悠と気を失っていた。

誰の所為であんな目に遭ったのか、今まで雫はすっかり忘れていた。今更ながら腹が立つ。

戸惑った様子の少女の元へ、雫と颯太は歩み寄った。

「このお方、先程の虫の騒ぎで気を失われたようなのですが——」

そう云う少女は、ふわりとした桃色の着物を身に纏い、先の我が儘娘とは対照的に、純真で澄んだ面立ちをしている。他方桃色の少女の膝に頭を載せ、目を瞑ったまま動かない我が儘娘を見下ろして、半ば呆れた雫は不快そうに云った。

「人にさんざ迷惑かけておいて自分は優雅に気絶って……あ、ええとあの、あなたの名前は？」

「わ、私に御座いますか。私は、桜と申します、お侍様」

ひどく丁寧にその少女、桜は頭を下げた。今度は雫が困惑する。

「え、侍？ いや、あの、私は……」

「伽羅倶利屋——伽羅倶利屋へ——」

その時——。

倒れたままの娘が、細く幽かそけくそう呟いた。

「わらわを、伽羅倶利屋へ——」

「……こいつ起きてるんじゃないの？」

まだ怒りの収まらない雫は、口を尖らせぶつぶつ云う。実のところ色っぽい女子おなじには、無条件で反感を覚える性質たでもある。

颯太はそんな雫を気にせず、桜に問うた。

「娘、伽羅倶利屋とは何だ」

「伽羅倶利屋は、確かこの近くにある、老舗しよせの旅籠はたごで御座います。聞くとここでは評判の名宿とか」

「よし、乗りかかった船だ——雫、其処へ行くぞ。負ぶってやれ」

ついさつきまで損ねていた機嫌は何処へやら、振り返るなりすぐ颯太は、明朗な調子でそんなことを云いだした。雫は耳を疑う。

「え？ な、なんで私が……」

「私は筆より重いものは持たぬことにしている。あの高みから落ちてびんぴんしておる雫なら、人の二、三人負ぶったところでどうということもなからう。それに私の泊まる宿も見つけねばならぬところだったしな。ほれ



行くぞ。桜とやら、与力同心の来ぬうちに、早く案内あないしてくれ」

「はい」

素直に頷き、こちらで御座いますと桜は歩み出す。その後から胸を張って続く颯太の後ろ姿を見ながら、雫は茫然と立ち尽くした。

そして、また都合よく気絶したらしい、地面に寝そべったままの色っぽい娘子を見下ろすと、再び深々と溜息を吐く。自分は兎角とかく、流されてばかりだ。

すると――。

ふと、何処からか強い視線を感じ、雫は振り返った。

振り返った先にいたのは――。

ただの小さな、童子であった。

年の頃七つか八つといったところの美しい、しかしどこか暗く陰のある面立おもだちをした男子おのこの童が、少し離れた道の角に、ぽつんと一人佇んでいた。

口をつぐんで小揺るぎもせず、童は上目遣いにじつと、雫を見つめている。

暫く、目が合う。

やがて童は、黙ったまま背を向けて、走り去った。

## 五

――しかし。

それにしても、人を負ぶっていくには些か遠い距離であった。加えて陽射も強く、遠方が揺らぐほどに暑い。さしもの雫も、はあはあ云いながら呟いた。

「まだ、ですか……?」

「着きました。こちらで御座います」

漸く桜の示したその建物へ眼を向けると、汗を拭った雫は、訝しげに眉を顰めた。

「何、これ……」

其処には理解不能なものが、いやに堂堂と建っていた。

一見すると、普通の江戸の建物に過ぎないように見える。が、しかし

ぐに、屋根に幾つも幾つも取り付けられた奇妙な金色の風車に眼が行く。風を受けて、一つ一つがくるくるぱたぱたと盛大に回っていて、それぞれの下から出ている銅線が、屋内の何処かへと繋がっている様子だった。雫は首を傾げた。

(風力発で……いやいやいやそんな馬鹿な)

屋根の天辺からは金属の棒が伸びており、更にその先には、謎の凶形の描かれた旗が悠然とはためいている。他にもよく判らない飾りやら動物を象った置物やらが屋根のそこかしこに据え付けられていて、全体としての統一感はあまりなかった。どれか一つぐらい、今にも落ちてきそうである。

他にも、用途不明の滑車が壁に取り付けられていたり、『剛力無双』と彫られた大看板が脈絡なく掛かっていたり、法螺貝が軒先にぶら下げられていたりと不可解な点は数知れない。颯太が近くの軒から垂れていた紐を何も考えずに引くと、横の壁に掛かっていた役者絵の表情が急に夜叉のようにならなくなって三人は動揺した。

また、外から見える処に竹格子の嵌められた枠があつて、その中には得体の知れない絡繰細工が置いてあつた。通りに向けて展示しているつもりらしい。その前には、誇らしげな字でこう書かれた板切れが立てかけてあつた。

『今月之發明品也』

「ええと、その、評判は——よいようですから」

呆れ顔の雫から微妙に目を逸らしつつ、何故か申し訳なきように桜は弁解した。

しかし一方で、頻りにここにこしている者もいた。

「うむ、気に入ったぞ、私はこういうのは大好きだ。行くぞ、雫ッ」

一人頗るすばぶご機嫌の颯太は、そう云って迷わず宿の中へ入っていった。桜は困り顔で雫をちらちらと見るも、やむを得ず、その後が続く。雫は、今月之發明品の前から動けずにいる。

そしてその背中の御姫様は、すうすうと心地よさげに寝息を立てていた。

「おや、ようこそいらっしやいまし——姫様ッ」

中に入った雫たちを愛想よく出迎えた番頭は、雫の背中の荷物に気づく

なり、いきなりこう叫んだ。

心身共に疲れ切った雫は、ぽいと投げ出すようにして、その姫様を上がり框かまちに下ろす。ようやくと息を吐きながら周りを見廻してみれば、内は幸いにもなかなか立派な造りをしていた。こざっぱりとしながらも趣がある。流石に評判を呼ぶだけのことはあった。

そう見定めるなりむつつり塞ぎ込んで何も云わなくなった雫に代わって、颯太が尋ねる。

「このお方の宿は、此方でよいのか」

「あ、は、はい、左様に御座います」

曖昧に頷きながらも、番頭は妙に背後の奥向おくむきをちらちらと見返り、気にしている。

宿の主人でもいるのだろうか、それともこの女ひと、やはり訳ありなのだろうか、などと雫は茹で上がった頭で考えた。それにしても当の姫様は、気楽にもまだ大人しくすやすやと寝入っているのであるが。颯太は続けた。

「どのようなお方は知らぬが、ちよつと仔細あつて気を失われたものでな、こうしてお連れして参つた次第だ。これでよろしいかな」

「はい、有難う御座います。お帰りが遅う御座いましたから、何かあつたのではないかともう心配で心配で」

人のよさそうな番頭は、相手を崩して何度も何度も頭を下げた。うんうんと大人物のように頷いていた颯太であったが、不意に何か思いついた顔になると、番頭に向かつてこう云った。

「——うん、そうだ、ことの序でだ。急な話で悪いが、私と、こちらの美しいお侍様も、此方に泊めてはもらえぬかな」

「はあ!？」

それを聞いた雫は、胸ぐらを掴みかねない勢いで颯太に詰め寄ると、桜や番頭に聞かれぬよう小声で云い募った。

「ちよ、ちよつとあなた、いきなり何訳分らないことを……」

「何が訳判らないだ。雫は泊まる場所はありますか」

「いや、それは……」

「何が起きたかよくは知らぬが、空から墜ちてくるとは雫もなかなか訳ありの様子だからな——それに、斯様な珍奇な装いでそこいらを彷徨うろたいてみ

る。またさっきのように目を付けられて、騙されるか連れ去られるか、何かの間違いでお縄を頂戴するかも知れん。加えてそなたの場合、性格も性格だ。何かと危険極まりない」

雫はそれを聞いて頬を膨らませ、口を尖らせた。颯太は嘆息する。

「だからそういうのが危ない。その上、万が一女子とばれた日には、何をされるか判ったものではないぞ。ここまで来てそなたがそのような目に遭っては私も寝覚めが悪いからな、袖振り合うも多生の縁だ。少しの間なら面倒を見てやろうと、こう云っているのだ」

滔滔と説教を垂れる颯太を前にして、雫は暫し、逡巡した。

確かに颯太の云うとおり、何が起きたか未だに判らぬこの状況では、頼る先など何処にもありはしない。元の時代に帰るあてすらないのに意地を張ってここを去れば、ふらふらと町を彷徨した揚句野宿するのみ、下手をすれば野垂れ死にである。本来ならば、迷う余地などない。

そう考えて視線を上げると、颯太と目が合う。

歳の割にあどけなさが過ぎる少年絵師は、腕組みをしたまま雫を見据えている。

——こいつに任せてよいものか。

そう雫は思い悩む。

ううん、と小さく唸りながらも、しかし仕舞いに、雫は渋渋頷いた。

(もう、仕様がな。なるようになれだ)

そんな雫の表情を見た颯太は、飼い犬を漸く手懐けたような会心の笑みを浮かべた。

「うんうん。素直に私に頼ればよいのだ。素直になれば雫もなかなか可愛いではないか。あはははは」

「ムカつく……」

「なんか云ったか」

その時——。

不意に何処か、近くから声が聞こえた。

「——どうしたどうした、姫様のお帰りかい」

あっけらかんとした女性の声であるが、不思議なことに辺りに人の姿も部屋もなく、何処から聞こえてくるのか判らない。首を傾げて、雫は周

困を見廻した。  
すると。

驚いたことに突然、廊下の天井の一部がぱか、と蓋を開けるようにして、音を立てて開いた。雫は目を見張る。途端に焦り顔になった番頭が、大きな声を出した。

「と、巴様っ」

その声と同時ににゅっ、とその四角く開いた穴から顔を出したのは――まだ十八、九と思しき、若い娘であった。くるくると悪戯っぽい円い眼をして、興味津津といった面立ちで雫たちを順ぐりに見ている。雫は啞然とした。

よいしょっと、と云って、その娘は身軽に飛び降りてきた。磨き上げられた板張りの廊下が、とん、と軽い音を立てる。

「だからあたしは外に出るなって云ったのに。云うこと聞かないからねえこの女」

巴と呼ばれた娘はふう、と息を吐くと、着物にまといついた埃をばんぱんと手で払い落とした。小綺麗な宿の造りと全くそぐわぬ、矢鱈と粗末な着物を身に纏っており、ろくに結いもせず櫛も入れていないらしいその髪は、好き放題に乱れている。鼻の頭は、煤で黒く汚れていた。

そして巴はすっ、と框に座すると、品よく頭を下げた。

「ようこそ伽羅倶利屋へ。女将の巴と申します。うちのお客様がお手数をおかけしたようで、どうも有難う御座います」

「女将……」

隣であわあわと慌てふためく番頭を横目に見ながら、雫は呟いた。奥向では柱の陰から、女中たちが恐恐此方を覗いている姿が見える。

これが、旅籠の女将なのだろうか。番頭たちの反応からするに、もしかすると見せてはいけない女なのかも知れない。顔の造作は愛嬌があり、身形髪型口調振舞も下品でこそないが、しかしどちらかといえは、よく気の回る百姓の長女とでも云った方が合点がいく気がした。

否、そんなことよりも――。

「何か」

低頭している巴の乱れた着物の胸元を、つい吸い付けられるようにして

雫が見つめていると、不思議そうに顔を上げた巴は首を傾げた。

そして視線の先に気付くなり、嫌だお侍様、と襟元を直した。

「見て減るもんじゃないにしたって、女の躰からだそうじろじろと眺めるもんじゃないよう。これでも年頃の娘なんだから、誰彼構わず乳見せて廻るわけにもいかないし」

「巴様——ご自重くださいませ」

汗をかきかき番頭は口を挟むが、巴は一向気にする様子もない。

「ご覧の通りの鳩胸出っ尻。帯に乗っかってみっともないったら」

そう云うと、肩を揺らして巴は快活に笑った。一方雫は目を逸らし、思う。

(鳩胸出っ尻……)

悶悶と暗雲立ち籠める妬忌とどの海へと沈没していく雫を他所よそに、これも一応年頃の颯太は、おほん、と小さく咳払いをして、話を戻した。

「女将。この美しい姫君のことは取り敢えず任せるとして、我我われわれ二人の部屋は取れるか」

「ええ何なりと。いいね、アンタたち」

即座に振り返ると、女中たちへ向かって巴は無を云わさぬ調子で云った。急いで用意をしに行った女中らの後姿を見て、こう見えても巴もやはり出来る人間なのだ、と雫は感心する。

そうして腰を上げた巴は、颯太に向かって続けて云った。

「一間ひとまでよろしゅう御座いますね」

「うむ」

「え、あ、ちよつ」

さらりと流されて、雫は言葉を挟めない。会ったその日に相部屋で男の子、ましてこんな奴と一晚を共にするなど、全く以て冗談ではない。がしかし、かと云ってこの状況では最早逃げようもなかった。苦い顔をしながら、雫は観念することにした。

それから巴は、思案顔になつて話を続ける。

「ただ——まだ日も高たかう御座いますからね。こちらにも支度が御座います。よろしければ少しの間お二方、この近くをゆるり巡っていらしては如何いかです。今日江戸にお着きになったのなら、かの戦場いくさばを抜けてこられたと云

うこと。さぞ気の塞ぐ思いをしておられましょう。気晴らしに、丁度よう御座いますよ」

先とは打って変わって上品な言葉遣いで話す巴に瞠目しつつも、雫はその言葉の一つに、小さな疑念を感じた。

(戦場……?)

此処が真実江戸時代の江戸ならば、当然そんな近場で大規模な合戦などしていようはずもない。否そもそも、颯太の力と云いこの宿と云い、先程から不可思議なことが多すぎる。

となると、此処は――。

しかし颯太は考え込む雫のことなど一向意に介する様子もなく、

「うんそうしよう、雫、桜、行くぞッ」

と満面の笑みで宣言した。案内をしてくれるな、と断定口調で頼まれて、桜はまたおろおろとしている。いつてらっしゃいませ、と巴はしずしず頭を下げる。

そして雫は――。

溜息を吐いた。

## 六

「……颯太」

「ん――」

「颯太」

「なんだ雫」

「この、着物は……」

呉服屋に無理を云って奥で着替えさせてもらった雫は、暫くしてから店の表に出てくるなり、颯太に面と向かって尋ねた。

「……これは、男物なんだけど」

「よく似合っておる」

「答えになってない！」

一切の断りなく颯太が勝手に選んだのは、深い紺の染緋に黒の帯、色合いも作りも明らかに男の品である。晒を巻いたとはいえ、胸元がすう

すうして如何にも心許なかった。

それから雫は桜に聞こえないよう小声で、しかし怒りも含めながら問い詰める。

「だから私は女だと何度言ったら分かるの。それに百歩譲って着物はいいとして……いいとして、その……」

「うん」

「何で下着まで……」

そう云って雫は、慣れない下穿きの感触にもじもじする。

さつきまで穿いていたものは、小さくくるめて袖に隠していた。どうしたものか迷ったが、結局何となく流れで締めてしまったのだ。

それを聞くと、颯太は訝しげに云った。

「嫌なら締めなければよいではないか」

「締めなかったらフンドシ手に握りしめて表に出てこないといけないじゃない！ 要らないって言ってるのに買うから……」

雫が何に怒っているのか判らぬ様子の颯太は、不思議そうな顔をしながら、雫のぐるりを廻って着物の具合を確かめた。

「先まで着ておったあの珍しい衣がよく似合っておったから、この色を選んでやったというのに。雫は色白ですらりとして肌も綺麗だから、濃い色の着物の方が引き立つだろう」

「なっ……」

異性から褒められることに慣れていない雫は、これくらいの言葉ですぐに動じる。頬が熱くなるのを感じ、気づかれていないかと咄嗟に颯太の顔を見遣るが、向こうは別段どうというつもりもないようだった。単に思ったことを思ったまま云っているだけらしい。

腕組みをした颯太は、満足そうに告げた。

「髪も黒黒と艶やかだ。派手派手しい身形みなりをせずとも充分美しいから心配せずともよい。絵描きの目を信じる。なあ桜」

「は、はい、よくお似合いで御座います、御剣様」

口元に手を当て、何故か仄かに赤面しながら、傍らに立つ桜は小さな声でそう応えた。これでは雫としても文句は云えない。押し黙ったまま、雫は頬を人差指で搔いた。



こうして身支度を整えた三人は、揚揚と江戸見聞へと歩み出した。

雑然としながらも独特の生気に満ちた江戸の町並みは、普段沈着な雫の心をも、何処か浮き立たせる。そちこちの物珍しい光景に眼を向けつつ、雫は隣を歩く桜に声を掛けた。

「桜ちゃん」

「あ、はい」

ぴくりとして、慌てて桜は雫を見る。その素振りや身のこなし、僅かに赤く染めた頬は、雫の女の眼から見てもたいそう可愛らしかった。雫は笑みながら尋ねる。

「あの女将さんって……どういふ人なのかな。あの宿の趣味は多分あの人のものだと思うんだけど。若いし、変わり者みたいだし。何か知らない？」

「はあ、何でも先頃先代がお亡くなりになって、あの方が継がれたというお話ですが——伽羅倶利屋という屋号は先代から付いたもののように御座います。先代が大層絡繰物を好むお方だったそうで、買い求めた人形や細工を以前より部屋に飾っておられたとか。そして幼い頃からそれらに囲まれて育った女将さんは、仕舞いにご自分でも作られるようになって、それで今では、あのようにな」

「なるほどね……」

「ただとても頭のよい方だそうで、宿もほとんどお一人で切り盛りしておられるようです。お代は安く、それでいて持て成しも他所より余程しつかりとして、あの方の代になってから一層名を挙げたという、専らの評判で御座います」

そう聞いて雫は頷く。確かにあれだけ好き放題に飾り立てておきながら評判はよいというのだから、大したものである。屋根裏で独り何をしていたのかは判らぬままだが、あまり人前に出るものではないと巴なりにきちんと言っているのだろう。雫は感嘆する。

「凄いい人なんだ……」

「御剣様も素敵で御座います——」

「え？」

ちゃんと聞いていなかった雫は桜に問い返したが、小柄な娘は、何でも

御座いません、とふるふる首を振るばかりであった。ふうん、と雫は首を傾げた。

「おうい」

すると、何処からか間の抜けた呼び声が聞こえた。

振り返れば、何時の間にか隣からいなくなっていた颯太が、此方へ走り寄ってくる所だった。手に何かを握っている。

「侍だと云うのに脇差がないでは不自然だろう。これを持って」

そう云って颯太は、どこからか買ってきたそれを雫に手渡した。見るとそれは、飾り気のない刀ふた振りである。しかも妙に軽い。

颯太はニツと笑った。

「玩具おもちゃの竹光だが、ないよりマシだ」

「ありがとう……」

珍しく雫は、素直に感謝の言葉を口にした。

こうして賑やかな町のあちらこちらを巡り、桜の案内を聞きつつ、雫は颯太と共に歩いた。そうしながら考えるうち、雫の胸中には或る仮説が浮かび上がってきた。空を墜ちていく時からすでにぼんやりと考えていた、今の摩訶不思議な状況を説明する、一つの「可能性」である。

(まさかとは思うけど……でも、この状況で「有り得ない」なんてことは何も言えないし……)

冷やかしに入った浮世絵屋から三人揃って出ると、雫は宿を出てこの方ずつと気になっていたことを、桜に尋ねた。

「あの、桜ちゃん。さっき巴さんが言っていた『戦場』いくさばって……あれ、どういう意味？」

「え、御剣様も東雲様も、其処を抜けて来られたのではないのですか」

目を円くした桜に問い返され、雫は口籠もる。まさか空から降ってきた、とは云えない。

すると、助け船を出すつもりなのか、代わりに颯太が応えた。

「いや、私たちは途中で偶さか一緒になったのだ。私はその戦場を何とか越えて来たが——雫はどうも近頃の江戸周りの事情を、よく知らぬらしい」

「左様に御座いますか——」

俯き加減に、桜は暫し口を閉ざす。

そして、判りました、と云って、その「事情」を訥訥と話し始めた。

## 七

「——戦国乱世の時代も遠くなり、江戸の町もこれこの通り、何処にも負けぬ賑わいを見せております。將軍様のご加護もあって平穩無事な日々が続き、皆幸せに暮らしております。しかし——幾年か前より、江戸の周りに不穩な空気が立ち籠めるようになったのです」

桜はそこで顔を上げると、雫と目を合わせた。

「それは——妖怪どもに御座います」

「あやかし……」

意表を突く耳慣れぬ言葉に、雫は口を噤んだ。

桜は続ける。

「幾千年の昔より、遠く東国に身を潜めていた物怪妖怪が、いよいよこの江戸の町を乗っ取るうと、大挙して押し寄せてきているので御座います——そこで將軍様は、隣国の殿様方にお触れを出し、化物どもを退治するたため三万の軍勢を差し向けました。そして、人と妖怪との戦は未だ、弛むことなく続いているので御座います」

雫はそこで何となく、周りをそぞろ行く町の人人の姿を見た。しかし、誰もそんな町の外の争乱など、知らぬ存ぜぬと云った風に見える。皆賑賑しく目の前の娯楽に興じ、身に迫る危機のことなど微塵も案じていない様子である。雫は不可解に感じた。

桜は雫の表情を伺いつつ、更に続けた。

「——御劍様のお察しの通り、町の人人は長く、そのことを知らされてはおりませんでした。いえ、未だに知らぬ人がほとんどです。人心を惑わさぬようにとのお上からのお達しに御座いました。が、しかし近頃では、私がこのように聞き知っておりますように、次第次第と噂は広まりつつあります。妖怪どもが攻め入ってきている、人の軍は今や劣勢である、そう遠からぬうちに、町の中にまで妖怪どもは入り込んでくる、否、既に入り込んでいる——そしてそれらは皆、真のことなので御座います」

桜はそう、真剣な面持ちで語り続けた。ちらりと見れば、颯太も真面目

な顔で頷いている。この突飛な話に、何も疑問は感じていないらしい。

雫は、眉を顰めた。

真実雫が何かの事情で江戸時代に時間跳躍タイムスリップしてきているのであれば、こんな語りを聞かされようはずもない。徳川の治世二百六十年、雫の知る限り、大きな戦は一つとして起こらなかった。まして妖怪あやかしの軍勢など、現実まことの世界で有り得るわけがない。と、なると。

此処に至ってようやく雫は、推測が確信に変わった。

やはり、そうだ。

此処は、本物の江戸では、ない。

虚言泡沫絵巻の中の、「江戸」なのだ。

それなら全てに得心がいく。天空から舞い落ちる羽目になった雫。絡繰細工に溢れた愉快な宿。武士と妖怪あやかしの間で繰り広げられる大合戦。にもかかわらず、随分と賑賑しく楽しげな江戸の町。そして、颯太のあの、不可思議な力。

これらはいずれも、歌方雅楽が描いた物語。絵空事の世界なのだ。

颯太や桜が頻りに「將軍様」と云って当代將軍の名を告げないのも、要は此処がどの時代でもないからである。元禄でも寛政でも享保でもなく、家康でも家光でも綱吉でも吉宗でも慶喜でもない。定まらぬ漠とした「江戸」を描いた夢物語なのだから、そもそも將軍様の名は、判つてはならぬのだ。

それに、先程から見て廻っている江戸の町の様子も、最初から何処かおかしかった。

詰まるところ——細細こまごまとした意匠に、時代の整合性がないのである。建物の様式、名の知れた店屋の位置、人人の衣服、文化、流行りもの、暮らし振り。長い江戸時代に於いて、そうした物事は僅かにとはいえ確実に転変している。しかし、雫の眼で見ても、今周囲に広がる町並みは、微細な点であちこち矛盾していた。様様な時代の事物が、混在しているのである。のみならず、颯太に連れられて入った読本屋や浮世絵屋。あれらも、置

いている品物が明らかにおかしかった。作風筆調が、江戸期全般に渡って万遍なく取り揃えられているのである。

黄表紙洒落本合巻読本、時期によつて流行り廃り取り締まりがあつたはずのそれらが、いずれも同じように、並べて置かれていた。浮世絵も、雫の知る限りありとあらゆる画家の作品が、余すところなく揃っている。本来ならば、有り得るはずもない光景である。

そしてそうした奇妙な点の一つ一つが——祖父から聞いた泡沫絵巻の内容と、ぴたり一致するのである。

稀代の趣味人、江戸きつての娯楽好みの歌方雅楽が自在に描いた、極彩色虚言泡沫絵巻。祖父と共に眺めていたあの僅かな間にも、数え切れぬほどの「誤り」が見て取れた。思うがまま、好き放題に描かれていて、云つてみれば、時代考証がなつていなかったのだ。

そして今——。

雫は、そんな世界の最中に、立っている。

「じわりじわりと市中にまで入り込んだ妖怪どもは、人を襲うて内側から江戸の町を喰い破ろうとしております。昼日中はまだよいので御座います、黄昏刻を過ぎた頃には、魍魎魍魎が動き出すのです。私のような女子は、出歩くことすらままなりません。見越入道に襲われた、鴉天狗が降りてきた、火車が天を駆けていった。そんな妖異怪奇の噂ばかり、耳にいたします。私はもう、恐ろしゅうてかありません——」

「おい雫、聞いているのか」

颯太に咎められても、雫は上の空のままだった。

しかし、そうなると、

一体自分はどうやって、この世界から抜け出せばよいのか——。

「——雫ッ」

颯太に肩を揺さぶられて、やっと雫は我に返った。

「どうしたのだ。雫らしくもない。聞いていたのか」

「え？ ああ、うん。聞いてたよ……」

辛うじて雫が頷くと、桜は話を続ける。

「それで——このままでは如何とも御し難いと、將軍様の命を受けたお奉行様方が、数多の古典漢籍を当たられたので御座います。そうしてようとつと判ったことには、何でも妖怪どもの大本には、『邪鬼』なるものがあるのだそうで」

「じゃき？」

雫は首を傾げる。やけに唐突な、聞いたこともない言葉である。颯太も同様の顔をしていたところからして、これは知らぬのであろう。桜はこくりと肯った。

「はい。邪なる鬼と書きます。これがために、妖怪の大群は江戸に押し寄せております」

「ほう。するとその邪鬼が妖怪の勸進元なのか。その鬼を打ち倒せば——」

「いえ、それはどうやら、そうした性質のものではないようなのです」

簡単に済ませようとする颯太に、桜は首を振った。

『邪鬼』とはしつかと像を取る妖物ではなく、云ってみれば、魅のようなもの。妖怪の邪なる魂魄を、総じて称するものと聞き及びます。万物に満ちる気の如く、邪鬼の魅は世のありとあらゆる悪しき妖しきものことに充ち満ちて、力を与え、心を歪め、禍禍しき姿を顕わにする。云い換えれば、数多の妖怪どもが須く、邪鬼そのものなので御座います——」

立て板に水と云った調子で桜は語る。感心して聞いていた雫は、最後に云った。

「詳しいね、桜ちゃん」

「いえ——」

ただの噂に御座います、と桜は羞じらうのように顔を背けた。

「しかしそれでは——如何に將軍様が軍勢を差し向けても無駄、ということではないのか」

颯太が首を捻る。確かに話を聞く限りでは、そんな茫漠たるものなど倒しようがないように思える。しかし桜は、そうとは限りません、と応えた。

「人の躰にも、気の流れの集まる場所に急所が御座います。それと同じように、邪鬼の強く深く凝る処がある、というお話で。そこを狙い澄まして叩けば、妖怪どもも取り敢えずは消え、去っていくのではないかと——云われてはいるのですが」

此処まで話して不意に言葉を濁すと、桜は少し、不安げな表情を浮かべた。雫は首を傾げる。

「どうか……したの？」

「いえ。これも、聞いた話に御座いますが——どうもこのところ、お武家様のお屋敷や、千代田のお城の様子がおかしい、と」

「江戸城が？」

雫がつい大きな声を出すと、御剣様つ、と桜が焦った。

「あまり大きなお声を出されませぬよう——」

「え、ああ、ゴメン……」

町人がお上の噂など、往来でおいそれと口に出すものではないのだろう。周りを行く人人に気取られぬよう恐る恐る、囁くように桜は云った。

「何やらお屋敷に人氣がないとか、奇妙な物音がしたとか、入ったきり人が出てこないとか——そればかりか、町の外で妖怪に立ち向かう軍勢にも、近頃めつきり將軍様からの命が届かぬようになった、と。まさかとは思うのですが——」

桜は言葉を切った。雫にも、この娘が何を云いたいのかは判った。

既に武家屋敷や江戸城の内にまで、妖怪どもが秘かに入り込んでいるのではないか——ということであろう。

妖しき邪鬼の魅が、ずるりずるりと、江戸の町を侵していく。

暗く澱んだ陰気の立ち籠める、町の行く末を雫は想像する。

厭な光景だった。

——だが、そうなると。

姫様と呼ばれていた、あの美しき娘。

あれが真実何処かの姫君ならば、そうした武家の屋敷から逃げ来たる身と云うことになる。それが市井の旅籠に身を隠すとは、この江戸の大事に、何かしらの関わりがあるのだろうか。

しかし——己の日常と余りにかけ離れた物事が続きすぎて、雫はどうやって考えを巡らしたのか、未だにさっぱり見当が付かなかった。

するとその時、不意に桜は足を止めると、前方を手で示した。

「あの橋を渡って此方を真っ直ぐ進めば、今お話したお武家様のお屋敷が並び、更に奥へ行けばお城に至ります。そろそろ日も陰って参りました

し、私はこれにて——」

云われて気づけば、次第に辺りは夕闇に包まれつつある。いつの間にかに、随分遠くまで来てしまった。心なしか出歩く人影も減っており、桜の話の通り、日が沈んだ後の妖物を恐れている様子である。桜の示す方には、緩く弧を描く反橋と、その向こうに建ち並ぶ幾つもの広い屋敷、そして夕焼に映える、大きく美しい城の影があった。

桜に感謝の言葉を伝え、また明日宿で会う約束を交わすと、三人は手を振って、それぞれの方角へと別れた。

何気なく、雫は空を見上げる。

夕陽の沈む遙か彼方には、残雪を戴き裾野を広げる、静やかな富士の山が見えた。

ああ、この頃は——。

江戸から富士が見えたのだな、と雫は思った。

霊峰を掠めて、大きな鳥が空を横切っていった。

八

「遅かったではないか。わらわをほったらかしにして何をしてやったのじや。待ち草臥れたぞこの愚か者ども」

伽羅倶利屋に帰りつくなり飛んできたのは、こんな無遠慮な罵倒の文句だった。

宿に帰り着くとすぐ、雫と颯太は女中に案内されるまま、突き当たりの松の間へと向かったのである。そうして部屋の襖を開けるなりこれだから遣り切れない。雫は閉口した。

「おんやお客様方、お帰りなさいませえ。そのお着物、よくお似合いですよお侍様」

部屋の中からにやけた顔で出迎えるのは、ずっと姫の相手をしていたらしい、女将の巴であった。上等の着物に着替え、身形も整えたようで、見違えるように綺麗になっている。こちらにも雫は閉口した。

床の間を背にして堂堂と座るその姫の前に、洪洪雫と颯太は膝を屈する。なまじ美しい女であるから、こうも大きな態度で目前に構えられると、従



わざるを得ないような気分になる。

「ふむ。とは云え——世話になったのは確かだな。礼を申すぞ」

典雅に微笑むと、姫と呼ばれる女は楚楚と身を正した。

こうした時どのような口を利けばよいのか雫は判らず、黙ったまま姫を見つめる。その視線には独特の力があり、思わず囚われてしまいそうな魅力があった。

他方それなりの心得があるらしい颯太は、頭を垂れてこう問うた。

「身分違いながらお伺いいたします。旅籠の下働きは貴女様のことを姫様、とお呼びいたしておりました。見れば何かと訳ありのご様子。私共にも出来ることがあれば、何なりとお申し付けください——それと不躰かと存じますが、姫様の御名をお教えいただけますでしょうか」

雫には必要以上にへこへここと恐縮しているように見えた。時代が時代だからこういうものなのかも知れないが、しかし自分に対する傍若無人な振舞と、あまりに落差がある。何かこいつはそう云う趣味なんじゃないか、と雫は若干疑いを持った。

僅かに目を畳に落とした美貌の姫は、やがて口を開いた。

「うむ——わらわは、浄瑠璃姫と申す」

するとその時、廊下の方からかたかたと、何やら乾いた音が聞こえた。何だろうか雫が目を向けると、徐ろに巴が立ち上がり、襖を大きく開けた。

その向こうにいたのは、三体の無愛想な顔をした日本人形だった。

それぞれ手に盆を持ち、茶を載せている。それらは廊下からそのまま部屋の中へ入ってくると、姫、雫、颯太の前に、ぴつたりと止まった。しかつめらしい表情で、巴が解説する。

「——茶汲人形十四號、十五號、十六號。全部で十八体いるよ。残らず見なければ、十八夜連続投宿をどうぞ」

「はあ……」

どう反応を返してよいものか判らない。それに傍目には、三体とも同じに見える。雫達が茶を受け取ると、仏像のような顔をした人形達は、大人しく廊下に帰っていった。

三人は茶を啜る。

一息吐きながら、浄瑠璃姫は話を続けた。

「——仔細は明かせぬが、さる藩主の一人娘じゃ。今は江戸の屋敷に住んでおる。日日平穩無事、楽しみと云えば家老を擲擻うくらい。退屈と云えばそれまでじゃが、幸いにして大禍なく過ごしておった。これ以上望むものもあるまい。しかしじゃ——」

そこで姫は、少しだけ哀しげな目付きをした。

「ある日、父上の様子がおかしくなった。振舞、顔付き、口にする言葉、はつきりとは云えぬが、どこか、何かがおかしかった。聡明そのものであった父上が、悪しく虚ろな眼をするようになった。そうして、明くる日には母上の様子が、続いて、家臣達が——次第次第に屋敷中の者の様子が、悉くおかしくなっていくたのじゃ。ふと気がつけば、そこかしこの薄暗がりに、異形の化物どもが湧いておった。蠢いておった。恐ろしかった——」

雫は先程桜から聞いた、邪鬼の魅の話の思い出す。

——やはり、そうなのか。

——人に取憑き、罪業を為すのか。

「風の便りに聞けば、江戸のお城もそのようになっていると云う。わらわは命からがら辛うじて屋敷を抜け出してきたが——今頃如何様になっておることか。思いもつかぬわ」

姫は伏し目がちに皮肉な笑みを浮かべる。雫達は、何も云うことが出来なかった。

すると唐突に、姫は雫に向かって云った。

「そこな侍。名は何と申す」

眼を円くした雫は、吃りながらも応える。

「え、わ、私？……御剣、雫……」

「わらわを守ってはくれぬか」

真摯な眼差しをした浄瑠璃姫は、雫に向かってそう頼んだ。雫は己が耳を疑う。

「守る？」

「屋敷も城も、今話したような次第じゃ。妖怪どもが何を思っておるのか知れぬが、抜け出でてきたわらわを狙ろうてくるやも知れん。広うて狭い

江戸のこと、遅かれ早かれ居所は突き止められる。その時、その妖怪が人に憑いておるか妖怪のままに来るかは判らぬが——あなたがわらわを、守ってはくれぬか」

麗しき娘に正面から見据えられて、雫は口籠もる。

「頼れる者が他にはおらぬ。昼間の立ち居を見る限り、若いとはいえ腕は立つようじゃ。御剣よ。頼まれてはくれぬか」

昼のように強引な様子はない。真剣な頼み事であるが故であろう。隣に座る颯太の姿をちらりと見たが、若き絵師は瞑目したまま、一言も口を挟まなかった。雫は迷う。

どうしたものだろうか——。

そこで、はた、と雫は気づいた。

もしかすると、彼女を守ることで、

この絵巻の世界から抜け出すことが出来るかも知れない。

理由は判らぬ。何となしにそう思ったに過ぎない。だが雫は今、歌方雅楽の描いた物語の中に居る。そして、どんな物語も何時しか終わるのだ。

ならばそのきつかけが、何処かにあるはずである。何とか雫はそれを掴んで、物語の先へ進まねばなるまい。幕を下ろさなければ、何時までもこの世界で彷徨う羽目になる。

それに、このまま何もしないよりは、動いた方がよいだろう。

——どうせ動くのなら、真っ向から立ち向かってやる。

雫は背筋をすっと伸ばすと、静かに頭を下げた。

「分かりました……謹んでお受けいたします」

そうか、そうかと嬉しそうに姫は頷いている。その無邪気な様が意外なほど可愛らしく、雫はほっと息を吐いた。これからどうやって姫を守ればよいのか、正直云って雫には皆目見当が付かぬが、しかしこうなった以上、やるしかない。

ふと気付けば、颯太はそんな雫の覚悟を知ってか知らずか、雫をちらりと眦めて、その涼しげな口元に僅かな笑みを浮かべていた。

## 九

「はあああああ……」

夕暮刻の薄暗い宿の廊下を一人腕組みして歩きながら、雫は情けない溜息を吐いた。

するとそれと同時に、廊下の壁に掛かった巴手製の時計の蓋がぱか、と開いた。中から犬の人形が出てきて、うわん、と鳴く。戌の刻らしい。それを横目に見て、辰の刻や巳の刻はどうするんだろう、と雫は一寸思った。

あの後浄瑠璃姫は、胸元から取り出した紙の雛人形のようなものを、いそいそと部屋の四隅に置いていた。卒塔婆に書いてあるような文字が記されていて、姫によると、魔除けになるらしい。そんなものを持ち歩いているあたり、姫とその一族が魔物に狙われているというのは、何かしらの力や由縁があつてのことなのかも知れぬ。

そうしてから再び元気な態度に戻った姫は、

「御剣よ。間違つてもわらわが襲われることのないよう万全を尽くせ。命を賭して戦うのじゃ、死んだら墓くらいは作ってやろうぞ」

と云いたい放題だった。颯太は颯太で、

「よかったな雫、姫様に取り立てていただいたではないか、一日にして大出世だ、あはは」

とまるきり他人事である。雫が全力で睨み付けても平気の平左で、お気楽な様子は一向変わらない。協力する気は芥子粒ほどもないらしい。

一方雫も、守ると云ったはいいものの、さてこれからどうすればよいのだろう、と次第に頭を抱えなくなった。いくら剣術兵法に通じていたところで、真剣を相手にすれば昼間のようになるのが落ちである。ましてこれから相手にするのは、物怪妖怪の類らしい。刀で斬れるものかすら定かではない。さしもの雫も、さっぱり自信が持てなかった。

こうして雫は、現実の世界では滅多に感じぬ不安にまといつかれながら、陰陰滅滅たる心持ちで宿の廊下をふらふら歩いていたのであった。別段何処へ向かうわけでもない。外出するわけにもいかぬから、宿の中を彷徨っているだけのことである。出来ることなら何処へなりと逃げ出してしまいたかった。雫はもう一度、嘆息した。

すると。

不意に妙な物が、雫の視界の隅に入った。

廊下の先、突き当たりの柱。

そこに——一本の棒手裏剣が突き立てられていた。

雫は眼を疑った。

足早に近寄ると、雫はそれをじっと見つめる。黒黒と光る鉄の棒は、美しく設しつえられた宿の中、一際に異様を呈していた。そしてそこには手のひらほどの小さな紙が、柱に打ち付けるようにして留められていた。

短く簡素な文が、墨でこう書きつけてある。

「じゃうるりひめを　しろへわたせ

さもなくば　えどのまちは

あやかしにおそはれる」

手裏剣を抜くと紙を手を持ち、雫は幾度もその文面を読み返した。それから振り返って、辺りの気配を伺う。当然ながら怪しげな者は、既に何処にも見当たらない。だが、

——何者かは判らぬが、既に動き始めている。

姫は確かに、狙われているのだ。

厭な予感に、雫は下唇を噛んだ。

## 十

——そして、その夜。

悪夢に魘うなされた雫は、夜半に目を覚ました。

酷い、夢だった。

息は上がり、躰は震え、浴衣は寝汗でびっしょりと濡れていた。

怖かった。幼子おきなのように泣き出しそうになった。痛いほどに胸が脈打っている。躰を起こした雫は思わず、隣の布団ですやすやと眠る颯太を見遣った。食事刻には箸の使い方、就寝前には布団の敷き方でまた一悶着あつたけれど、一度床ひたびについてしまえばその寝顔は可愛いものだった。そんな

姿を見て雫は、ほんの少し心が安らいだ。

そうして雫は、悪夢のことを忘れようとした。

けれど——もうどんな夢だったか、思い出せなかった。

頭を小さく振ると、雫は乱れた浴衣を整える。むしろ余計に寝覚めが悪い。そのまま眠る気にもなれず、雫は結局、廁へ立つことにした。準備のよいことに、行灯の傍らには持手の付いた蠟燭が置いてある。それに火を灯すと、雫は真つ暗な廊下へと歩み出した。

揺れる炎の不確かな明かりに照らされた宿の廊下は、光と陰の境界が曖昧だった。まるで、自分の気持ちのようだ、と雫は思う。右へ左へふらりふらりと揺れ、どちらとも定まらぬ。そうやって自分は、いつも誰かに引かれ、何処かへ流されていく。

その時、不意に雫の頭の中に、妙な想念が浮かんだ。

雫は今、間違いなく泡沫絵巻の中にいる。それは確かだ。

而して——、

これは夢なのか、

それとも、現なのか。

そんなことを、雫は思った。

雫は昼間、町を歩いた時のことを思い出す。絵巻の中でありながら、地は確と在り、空は悠に広がる。人は其処に生き、己は此処に居る。雫の知る世界と何等変わらず、触れる物は悉皆揺らぐことなく存在している。儚い幻とは到底思えない。此処は確かに、現と思えた。

だがしかし、先までの悪夢、見ている間はあれほど恐ろしく、見る物触れる物いずれも真実のこととしか思われなかったあの厭な夢のことは、今や欠片も思い出せなかった。

まるで、端から無いものであったかのように。

ならば——。

その忽ちに忘れた夢のように、

自分の元居た世界のこと、いずれは思い出せなくなるのだろうか。

否。

逆に、元居た世界に戻ったならば、

この絵巻の世界は、揺らぎ霞み消え失せてしまうのだろうか。

いずれにしても、己の生きるこの現は、容易に虚言へと変わり果てるようだった。

ならば——そんな泡沫の如き浮世に、一体何の意味があるというのだろうか。

ぼんやりと考える。

雫は、静かに俯いた。

すると、突然。

とん、と雫の右肩に、手が置かれた。

「ひっ！」

「——おしっこ」

飛び退くように雫が振り返った先には、眠そうに眼を擦り、はだけた浴衣を引きずった颯太がいた。まるで母に縋る童のように、雫の浴衣の裾をくいくいと引いてくる。寝ぼけて起きてきたらしかった。何やら気恥ずかしくなった雫は、起こそうとして呼びかけた。

「ちよっと、颯太、颯太」

「んう」

頬を軽く叩いても、颯太は赤子のようにいやいやをするばかりである。

仕方なく雫は、そのまま厠へ連れて行ってやることにした。少し迷ったが、雫は颯太の手を取る。颯太は抗いもせず、すぐに握り返してきた。

真っ暗な廊下を二人して歩きながら、雫はこんなことも思った。

——そういえば、颯太はどういう子なんだろう。

いきなり出会ったまま結局一日を共に過ごしたが、思い返してみれば、下手の横好きで絵を描いているという以外、颯太のことは何も知らぬ。改めて見ても、年の割に些か幼すぎる他は、ごく普通の少年としか思えなかった。

——何者なんだろうな。

ふわふわと欠伸をする颯太を横目に見ながら、雫は首を傾げた。

——あれ。

その時雫は、ふと奇妙な違和を感じた。  
変だ。

なんだか、

廊下が長い。

歩いても歩いても、

軋む廊下が終わらない。

おかしい。

暗い廊下が何処までも何時までも続き、一向に厠へ辿り着かない。

今自分が何処にいるのか、判らない。

ぼやけた炎の光に映るのは――、

冷たい廊下の床板だけだった。

雫は、視線を天井へ向ける。

そこへ、べろん、と、

赤い舌を出した大きな顔が、満面の笑みを浮かべて勢いよく垂れ下がってきた。

雫は絶叫した。



